

国内研修報告書

- ・ テーマ：徳島県 海陽町における 地域での防災活動の取り組みについて
- ・ 研修先：徳島県海陽町
- ・ 期間：2024 年 8 月 7 日～8 日
- ・ 参加人数：4 人

国内研修報告書

今回私は、30年以内に起こるとされている南海トラフ巨大地震や地球温暖化による影響を懸念し、正しい防災知識を身につけるために防災教育が地域でどのように行われているかを調査するという目的の下、徳島県海陽町阿波海南文化村を研修先として選んだ。徳島県は、南海トラフ巨大地震と活断層地震に備え、「死者ゼロ」を目指す「とくしま-0作戦」を掲げている。また、2013年に海陽町の穴喰中学校で中学生向けに2泊3日の防災キャンプが行われた。このような防災に対する意識の高さや地域で行われていることに興味を持ったことが徳島県を選定した理由である。

今回の国内研修は夏休みを利用して3日間行われた。1日目は、夕方に家を出て新宿バスターミナルまで向かい、初めての夜行バスに乗って大阪駅まで向かった。

2日目は、朝早くに大阪駅に到着し、大阪駅から徳島駅までの高速バスに乗車した。その後、徳島駅からバスに乗り、東部防災館おきのすインドアパークへと向かった。この防災館を短い時間であるが、見学をすることができた。この防災館は4階建になっており、1階には、多様なスポーツを楽しむことができるインドアスポーツパークや徳島の素材を活かしたカフェレストランがある。2階は、子どもたちだけでも安心して学習を楽しむことができるカルチャー&イベントスペースになっており、3階には、プログラミングを中心としたパソコンスクールを開催しているテクノロジーラボやアクティブラーニングを通じてこれからのグローバル社会で必要になる英語力や自主性、思考力、自己表現力を通じて養うことができる English Afterschool マリンピア沖洲、さらに赤ちゃんを育てている方やもうすぐ家族として迎える方の居場所となるクリエイティブラボがある。4階には、屋上で海を見ながらスケートボードができるスケートボードパークがある。そのため平時は、憩いの場として利用され、子どもから大人まで楽しむことができる施設である。防災館の副館長にお話を伺ったところ、この防災館は元々、徳島新聞社の印刷工場であったが、改修工事が行われ、防災館として新たに生まれ変わった。災害時は、物資の輸送を主に行っており、飲み物や食べ物を県内に送っている。物資を送る際に、災害の報道が多い場所は物資が多いため、報道が少ない場所を中心に物資を送るよう工夫しているとおっしゃっていた。私は、災害時に最も重要なことは、避難場所を開放することだと考えていたが、それだけではなく、工夫して物資を輸送することが被災者の命をつなぎ止めることに繋がるということを学んだ。

防災館を出た後、徳島駅に向かうバスに乗っている時に日向灘を震源地とした大きな地震が起きた。その影響で徳島駅から今回の研修先である海南町までの電車に乗っている途中で電車が止まってしまい、これ以上先に進むことができなくなってしまった。私は、突然の出来事で焦ってしまったが、一緒に同行していたメンバーと協力して周辺のホテルを探し、無事に泊まることができた。

3日目は、地震の影響で海陽町に向かうことができなかったため、新幹線を利用して帰宅した。本来行う予定であった海陽町阿波海南文化村での聞き取り調査は、後日 zoom でインタビューをするという形に変更した。

初めての国内研修で全く予測していなかった地震を経験し、あまりにも突然のことで驚き、一瞬冷静さを失ってしまったが、メンバーが元々予約していたゲストハウスをキャンセルする姿や周辺のホテルを探している姿を見て冷静さを取り戻すことができた。冷静さを欠いて何も考えられなくなってしまうことで命を落とすことにつながるため、まずは落ち着いて自分ができることを考え、行動することの大切さを改めて学ぶことができた。このことがきっかけで予測できない地震やその他の災害に対する防災の意識をより高められた。今回の地震の影響で予定が大幅に変更になってしまい、目的地にたどり着けなかったことがとても悔しかったが、今回の国内研修のテーマが防災に関する内容であったため、良い経験になったと感じた。

夏休み明けに大学で空きコマを利用して徳島の役場の方々に zoom で聞き取り調査を行った。海陽町は、徳島県の最南端に位置しており、人口約8,200人の町である。海陽町の宍喰地区は太平洋に面しているため、南海トラフ巨大地震により津波高16メートル、さらに津波到着時間が第1波で6分、最大波で44分が想定されている。そのため地震が起きた後は迅速な対応が必要な地域である。昭和21年に起きた昭和南海地震で津波の被害を受けており、学校での防災教育への取り組みだけではなく、地域住民の防災意識も高まった。また、2011年に起きた東日本大震災がきっかけで日本の防災意識が高まり、海陽町でも2年後に宍喰中学校で防災キャンプが開かれた。防災キャンプに参加した人数は約50人であり、宍喰中学校の1年生26名、地域住民5名、教員を含めた町関係者16名、県キャンププロジェクト運営委員会・事務局3名であった。防災キャンプでは、地域に伝承される津波などの被災の歴史を再確認することで防災に対する意識を高めるとともに、防災・減災の実践的な取り組みの知識とスキルを身につけた。また、中学生が避難所生活を体験することで、避難所や地域防災のあり方について考える機会を与え、学校防災教育の学習成果とつなげ、将来、地域防災において中心的な考え方を果たす青少年を育成することを目的としている。防災キャンプで体験できたことはさまざまであり、起震車

体験や避難所や就寝場所の設営、炊き出し補助、夜間移動訓練、そして南海トラフ巨大地震についての徳島大学教授の講演などがあった。防災キャンプを経験した中学生は、「避難所での生活は、思ったよりストレスが溜まったりすることがよく分かった。」「自分たちが逃げるときに、大きな声を出してみんなに知らせるなど率先避難者にならないといけないと思った。」など、さまざまな感想を述べていた。しかし、課題もあり、徳島の役場の方々は「避難所生活は地域住民が主体となっていく訓練が大事なため、訓練方法を見直す必要がある」、「一過性に終わらせることなく、継続させることが必要である」とおっしゃっていた。また、防災キャンプだけではなく、学校でも防災教育を行っており、学期ごとに1度避難訓練を行ったり、避難場所が何処にあるのかを確認するために登校している間にも避難訓練を行っていたりするとおっしゃっていた。

今回の zoom 会議で2013年の防災キャンプを中心にお話を伺ったが、実際に参加しないと体験することができないことばかりでもし機会があれば参加してみたいと感じた。今まで地元の小学校や中学校、高校で避難訓練を行ったが、その頃は、避難訓練は同じ動作を繰り返すだけでつまらないと感じていた。今回の国内研修や zoom 会議で避難訓練は、予測することができない災害から身を守るために避難場所を確認したり、自分自身が正しく行動することができているかを確認するために行われているということに気づかされた。そして、いつ何が起きてもおかしくない地震大国の日本で生きていく上で防災について考えることの重要性を学んだ。